あかしずえ

2023年12月
第744号

日本基督教団　平塚教会
発行人　平塚教会
編集人　中山洋司
〒254-0045　平塚市見附町6-18
電話　〇四六三（32）八八三一

# 差別と幸せ

平塚教会牧師　北川一明

**私たちは、四方から苦しめられても行き詰まらない。**

（Ⅱコリント四・8）

世には様々な讃美歌があり、様々な歌い方があります。礼拝で使う讃美歌については役員会でもしばしば話題にあがります。役員会で確認されている原則は次の二つです。①何を使うかは神学の問題なので、選択には牧師の考え方が反映される／②かといって牧師が交替するたびに教会で公的に使う讃美歌が変わるわけではなく、決定の主体は牧師ではなく「教会」である。

ギリシア語アルファベットの中でいちばん小さな文字はι（イオタ）です。信仰を言い表す言葉にιを入れるか入れないかで、命をかけた教会会議が開かれたこともあります（アリウスvsアタナシウスのホモ（イ）ウーシオス論争）。神さまのことは人間には分からない部分が残るので、「聖霊の導く教会会議の機関決定」は、ある意味決定的です。

平塚教会の公認讃美歌は『讃美歌21』として既に機関決定されています。好き嫌いで変えるものではありません。ところが讃美歌21自体は、教団の中でオーソライズされているわけではありません。

讃美歌21ができたのは、讃美歌一九五四年版が「古くて分かりにくいから」というのがおもな理由だったでしょうか。しかし「本当は教団出版局の資金集めのためだ」と揶揄されます。「公認讃美歌を五四年版から21に変更する」という機関決定のないままで出しているからです。

出版されて四半世紀を経たため、その評価は相当程度に定まってきました。平塚教会は、時代に合った教会公認讃美歌について、改めて検討を始めても良い時期かと思います。

「時代に合った」讃美歌とは、たんに今様（いまよう）というわけではありません。俗世で考えられる「時代に合った」とは違って、いかなる時代でも変わらないものを示す必要もあるので、流行に抵抗することが逆に「時代に合った讃美歌である」ともいえます。

讃美歌21のメロディは原典主義をとっているものが一

## 目　次

差別と幸せ　牧師 北川一明 …1
聖書之友教会報告　聖書之友教会牧師 金園播 …3
秋晴れの下で墓前礼拝 …3
大人と子どもの合同礼拝 …4
編集後祈 …4

定数あり、時代を超えた普遍性を示す点では肯定評価されます。ただし一九世紀以降の洋楽が元になっている日本の音楽教育ではフォローされていない時代の曲なので、練習を指導できる人が少ない恨みがあります。また、原典主義といっても、讃美歌21の原典解釈が既に時代遅れになっているかもしれません。

讃美歌21の歌詞は、逆に一九七〇～八〇年代当時のごく一時的な歌詞文化に迎合して作られました。そのため『おとずれ』前月号で指摘した『こどもさんびか』と同じ問題をかかえることになりました。

かといって五四年版にも問題があります。多くが基本三和音しか使っていないホモフォニーで、音楽性の発達が小学校五年生レベルで止まっています。21と五四で良いとこ取りをしたいものです。

昔の歌詞には、差別語、不快語の問題もあります。差別語、不快語については、ただ讃美歌の歌詞の問題に留まりません。信仰上の大きな問題を内包しています。

差別について、最近のキリスト教会は信仰を歪めて単なる社会運動になったのではないかと懸念しています。キリスト教は、差別をなくす宗教ではありません。自分が差別を受けてもそれを問題としなくなるのがキリスト教信仰です。

教会が差別に苦しむ人を解放しようとするのは良いことでしょう。しかし特定の人を名指しで「この人が差別を受けるのは不当だ」と主張すると、その人を助けるつもりでかえって不幸にする危険があります。不当な扱いを受けている人が相手を憎い敵とみなせば、差別を受ける不幸の上に人を憎み世を恨む不幸まで背負います。

私たちは誰でも、世で不当な扱いを受けることがあります。不当な目に遭ってもそれを乗り越えて幸せになるのがキリスト教信仰です。敵を憎み自分の権利を守ろうとするのは当たり前ですが、不当な相手を愛せるようになって、双方で幸せになるのがキリスト教信仰です。

韓国・朝鮮人を差別する言葉がインスタント・カメラの呼称に使われていた時代がありました。妻が韓国人である私にとっては当時の差別語が使われなくなったのは嬉しく思っています。ただ人に差別感情のある限り差別語はなくなりません。たとえば「障がい者」という言葉は「人格の尊厳は変わらないが、たまたま障害を負っている人」という意味で使えます。それ以外にも侮蔑感情を込めて「障がい者」とののしることも出来ます。差別語を禁止すれば、差別の意味のなかった別の言葉が差別の意味を担い始めます。

不快語は別の判断が必要です。クリスマスの讃美歌には、近頃は不快語とされがちな言葉が頻出します。神の御子のご降誕に直面して、信仰者は自身の卑しさ、低さ、浅ましさ、醜さ、穢らわしさを痛感し、それを言表した歌詞だからです。自己の卑賤を受け入れながら、それを超える大きな喜びを共有するのがクリスマスの信仰です。

差別語、不快語は刻々と変わって行きます。世の後追いで言い換えるのではなく、信仰的な判断が必要です。落ちついた議論、検討をしたいものです。ただ、法的な言葉にまでなってしまった「社会運動標ぼうゴロ」とは議論になりません。平塚教会をまもるためには、一部のクリスマス讃美歌は、歌うのを諦めることが次善の策でしょうか。

# 聖書之友教会報告

聖書之友教会牧師　金園播

私の仕える聖書之友教会は、二十年来存亡の危機にあり、今は信徒さんの一人は遠方、一人は施設入居です。礼拝は他教会会員と引退教職の三人で守っていますが教会総会を開くことが課題です。

夫婦とはいえ平塚教会の牧師に神経を使わせると平塚教会に迷惑をかける心配があり、二〇二〇年に正式に協力を依頼しました。「出来る範囲で」とのご回答に甘えている状態です。平塚教会のみなさまにとっても霊的に善い刺激になっていただければと願っています。

老朽化のため教会建物と併設アパートの建て替えが急務です。新宿から電車で一〇分、駅から七分の所に九七坪の土地があるので国際学生会館を目指していました。ところが教団の規則で土地を担保に借金することは出来ないことがわかり、一時は途方に暮れました。クリスチャンの建築士さんが土地の三分の一を売却すれば建築資金を捻出できるとの見通しを示してくださいました。どうぞみなさま、引き続きお祈りください。

# 秋晴れの下で　墓前礼拝

爽やかな秋風がここちよく吹く中、10月29日平塚市土屋にある湘南キリスト教墓苑にて墓前礼拝が行われました。

当日の出席者は33名。お会いした瞬間、「誰だったかな？」と思い出すのに時間がかかったお方もおられましたが、お互いに名乗り合い、懐かしい昔の思い出に会話が弾んでいました。

久しぶりに訪れた墓苑は、砂利道の坂を上り切った駐車場脇に墓苑の入り口があります。入口からなだらかな斜面を登って墓苑の中に入っていきますが、西端にある東屋まで続く小道がアスファルトできれいに舗装されてとても歩きやすくなっています。高齢者にも優しい墓苑になったなと思いました。

墓苑の周りの木々は、背も高くなり、墓石に覆いかぶさるように生い茂ってきました。例年ですと葉が色づき始めるのですが、今年は気温が高いせいか緑のままでした。

午後一時三十分　北川一明牧師司式により墓前礼拝が開始されました。

今回、墓苑への納骨はお二人で、川島咲子姉のご遺骨は後見人の方が、市川一雄兄のご遺骨はご家族の方がされました。

「枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって主なる神はこう言われる。見よ、私はお前たちの中に霊を吹き込む。するとお前たちは生き返る。私はお前たちの上に筋をおき、皮膚で覆い、霊を吹き込む。するとお前たちは生き返る。そしてお前たちは私が主であることを知るようになる。

（エゼキエル書三七）」

を聖句にメッセージがあり、祝福をもって墓前礼拝を終えました。

なお、翌週11月5日の主日は、永眠者記念礼拝（特に「コロナ禍の4年間、教会関係の逝去者を偲んで」）を行いました。遠方よりご遺族の方も出席してくださり、ともに礼拝を守れましたことを感謝いたします。

**コロナ禍の4年間に、ご召天された方**

（　）内召天日

阿部雄次牧師（20・1・20）
市川ハツエ姉（20・6・10）
岩田　染子姉（20・7・26）
鈴木　次子姉（21・9・10）
蓮見ミツ子姉（21・10・7）
佐藤　キヌ姉（21・10・15）
齋藤　宗三兄（22・1・1）
原田伸一郎兄（21・1・18）
内山比呂子姉（21・2・7）
貝原使徒子姉（23・6・3）
川島　咲子姉（23・9・26）

## 大人と子どもの合同礼拝

「会堂内に誘導する係が必要じゃないかな？　当日当番でない人は？」

「園児は、幼稚園の椅子を持ち込みますか？　それとも会堂の礼拝席？　教会学校は礼拝席をいくつ使いますか？」

「保護者の中には、会堂での礼拝が初めての人もいるね。座る場所や諸注意を映像で知らせたら分り易いのでは・・」

11月役員会の一コマです。

11月12日、大人と子どもの合同礼拝が庄司幸夫兄の司式で行われました。当日の早朝は土砂降りの雨でしたが、園児が幼稚園に登園する頃には、雨もやみ雲の合間から青空とお日様が見える礼拝日和となりました。

会堂には、平塚二葉幼稚園児と保護者（ご家族総出で来られた方も）・教会学校生と保護者・教会員が一堂に（その数およそ１４０名）会しました。

コロナ禍にあって4年、会堂の席は間をあけて着席していましたが、今回は間を詰めて座っていただきました。会堂の全席と三階の席がピタリと埋まり、パイプ椅子を出すことなく、皆さんで礼拝を守ることが出来ました。

北川一明牧師より、「**手をかけるより心を掛ける**」と題して、創世記第3章6・7節アダムとエバの話を基にメッセージがされました。説教後の祈りの時、園児達の声は天まで届くくらい大きく響きましたね。蛇足ですが10時には近隣の駐車場は満杯でした。

## 編集後祈

急に寒くなりましたね。皆様体調管理にご留意されてお過ごしください。

「誰も自分の体を憎んだりせず、養って大切にします。（エフェソ五・29）」ご自愛ください。

（編集子）